沙織（さおり）

主人公の彼女。
付き合って半年でまだキス止まりという
非常に奥手な女の子。

むかし、男子達に胸がでかい事でいじめられたトラウマから
自分の体に自信がなく、エッチをしたら
嫌われるんじゃないかと不安に思っている。

その為度々家に誘ってはいるが
いざエッチな事になると怖くなって拒んでしまう。

自分に自信をつけるために
内緒で毎日オナニーをして特訓に励んでおり、
主人公といつかエッチできることを夢見ている。

美羽（みう）

主人公がお付き合いしている彼女（沙織）の妹。
彼女の家を訪れるようになってから度々
顔を合わせていて、実の妹のように仲が良い。

姉とは正反対で性に関しては非常にオープンで、
童貞の主人公にエッチな話を振ってからかってくる。
エッチな知識は豊富だが、キスも未経験の処女。

姉と付き合っているという事は理解してはいるが、
いけないと思いつつもひそかに主人公に
想いを寄せている。

半年前。
俺は同じクラスの女子に告白をしてお付き合いを始めた。
彼女とお付き合いしてからの半年間、色々な事があった。

毎日一緒に登下校して、お昼ご飯を食べたり
デートに行ったり。彼女の家にも行ったし、今では夕飯を
彼女の家族に誘われる様な仲だ。

充実したリア充生活。
決して不満に思う事などないのだが…

今日は日曜日。
彼女と外で軽くデートをした後、
俺は彼女の部屋にお邪魔した。
そこでキスをしたタイミングで彼女の胸を触ると、
ハッキリと拒絶されてしまった。
「んっ……あ…嫌っ…ダメ…」
「あ…」「めん…沙織…」
「ご、ごめんなさい…。
私…そういうのは…まだ…」
「そ、そっか…」

「ご…ごめんね…」
「…いいんだよ。慌てなくてもさ…」
「うん……ごめんね…」
「ううん……」
……部屋の中に気まずい空気が流れる。
「あ…あの…ジュースおかわりいる？
私持ってくるねっ！」
「あ、うん…」

俺は沙織が部屋を出ていった後、軽くため息をついた。

沙織の部屋には何度もお邪魔したが、こんな調子で毎回駄目になる。決して俺は、エッチ目的で付き合った訳ではないのだが…

（ぐあぁぁっ…！エッチしたいっ！）

俺は心の中でそう叫び、思わず頭を抱え込む。俺たちは付き合ってからこの半年間、一度もエッチをしていない。性欲旺盛な時期の俺には正直かなりキツイ事だ。

『あはは、大変だね。お兄ちゃんも…』
「あ…美羽…もしかしてさっきの聞こえてた？」
「うん。美羽の部屋隣だからね。お兄ちゃん達の声、丸聞こえだよ？」
「そっか…」
この子は彼女の妹の美羽（みう）。彼女の家に行くようになってから、良く遊んでいる。
明るくて人懐こい性格で、なぜか俺をお兄ちゃんと呼び、俺に良く絡んでくる。おとなしくて引っ込み思案な沙織とは真逆の性格だ。

「お兄ちゃんは今日も童貞か～。性欲有り余って犯罪に手を染めかねない勢いだよね。そうならないようにお土産にまたお兄ちゃんの好きそうなオカズでも渡してあげようか？」
「今日はやめとく……。抜いたら余計虚しくなりそうだし…」
この子はなんの恥じらいもなく、俺にエロ話をふっかけてくる。そんな彼女の態度もあってか、性事情に関しては俺も割りとオープンだったりする。

『…相当落ち込んでるみたいだね～。なんなら相談に乗ってあげようか？』
「…相談？」
『うん。美羽、お姉ちゃんの妹だし。少しは力になれると思うよ？』
「あ…あぁ…そうかもな…」
美羽は俺に耳打ちしてくる。
『ここじゃお話できないだろうし、後でお兄ちゃんの家に行くよ？』
「あ…あぁ…。分かった」

そんな訳で、夜。
美羽が俺の家に来たわけだが…。
「へー、ここがお兄ちゃんの部屋か～。意外と片付いてるね」
「まあな…」
「ふふーん♪」
美羽は俺の部屋に入ると、いきなりベッド下を物色し始める。
「あ、おい。何して…」

「んー？お兄ちゃんの性癖でもチェックしようと思って～。…あれ、無い…」
「…そんなベタなとこにエロ本隠すなんて、何年前のラブコメだよ…。今じゃパソコンやスマホで見る時代だぞ」
「ちぇっ、男の人の部屋に行ったら一度やってみたかったのに。つまんない～」
「…お前は俺の性癖をチェックする為に家に来たのか？」
「あはは、ごめんごめん。冗談だって…」
小悪魔のような表情を浮かべながらそう言う美羽。半分マジだっただろ…

そして美羽は当然のように俺の机の椅子に腰かけた。
俺は丁度向かい合うようにベッドに座る。
「…それで？お兄ちゃんは何が悩みなの？
やっぱりお姉ちゃんとエッチできない事？」
「…まぁ、そうだな。
さすがにもう半年も付き合ってるし…」
「半年かぁ～。結構経つよね。
今じゃ美羽ともこうやって普通に話してる位だもんね」

「そうだよな…」
「初めて家に来たときのお兄ちゃん、すっごい緊張してたよね。今でも思い出しただけで笑えちゃう」
「…仕方ないだろ？彼女の家に来るなんて、一大イベントだぞ？」
「どうせエッチできるとか思ってたんでしょ？」
「まぁ…な。そりゃあ彼女から家に誘われたら誰だってそう思うだろ？」

「うーん。気持ちは分からなくもないけど、ちょっとそれは期待し過ぎかも…」
「そ…そうか？」
「ちなみに美羽なら何時でもどこでもオッケーだけどね？」
「はいはい…」

こうやって俺をからかって来ることはしょっちゅうなので、いつものように適当にあしらう。
「…まあ、お姉ちゃんの場合、何も考えてなかったと思うけどね…」
「だよなぁ…。俺の事、そういう対象として見てくれてないのかな？」
「でも、キスはしてるんでしょ？」
「まぁ、なんとか…」

「お姉ちゃん奥手だからね～。キスだけでも大したもんだよ。もうちょっとじゃないの？」
「そうだといいんだけどな…。今は触っただけで拒否されるし…」
「多分お兄ちゃんの触り方がいやらしいんだよ。エッチしたいって欲求が先走りすぎ。お姉ちゃんはそういうのは嫌いだと思うよ？もっと大人の対応をしなくちゃ」
「そんな事言ってもなぁ…。女の子の体なんて初めてだしさ…。興奮を抑えるのが難しいって」

「そこなんだよね。
そもそもお兄ちゃんが童貞なのがいけないんだよ」
「いや…彼女いる身でそれは今更だし。俺にどうしろと？」
「うーん、それじゃあ美羽で童貞捨てちゃう？」
「はぁ……
そういう冗談言うのやめとけよな」

「冗談なんかじゃないよ？かなり本気なんだけどなー」

そう言って美羽が足を急に開閉させている。
その動きに目をやった瞬間…

「……っ」

チラチラとスカートから白いものが見え隠れしている。
それに気がついた俺は思わず視線を逸らす。

「どうしたの？」
「美羽…パンツ見えてる」
「…見せてるの。コーフンする？」
ニヤリ
「こ、興奮なんかするかよ…お前のパンツなんか…」
とはいえ、俺は美羽のパンツをつい横目で見てしまう。

たまにパンチラさせてくることはあったが、この構図はなかなかエロい。
それに、今日抜いてなかったから、正直いつもに増して興奮度がやばい。
「うーん？素直じゃないなぁ。お兄ちゃんは美羽のパンツが気になって仕方ないくせに」
「そんな事は……」
「女の子の体、知りたいんでしょ？」
「……沙織以外の体は…別に…知りたくは……」

「強がりばっかり言って…。じゃあなんで今もパンツ見てるの？」
「それは……」
「お兄ちゃん、美羽がパンチラさせるとき、いつもそうやってチラ見してるよね？美羽知ってるんだよ？」
「ぐっ……」

「もう…決めた！
美羽、お兄ちゃんの為に一肌脱ぐよ！」

「えっ？ちょっと美羽？！」

美羽は俺の前で立ち上がると、服を脱ぎ始めた。

「わっ…ば、バカッ…」

「…ほら、ちゃんと見て？
意外と女の子の体してるでしょ？」
「な…何やってんだよ…
早く服着ろって！」
「もう。
女の子がわざわざ脱いでるのに、見ないのは失礼だよ～」
「いや…まずいだろ…だって俺には…」

「…大丈夫だよ。わたし妹だし、ちょっと触れるくらいなら。女の子の事少しでも知っておかなきゃ、いつまでたってもお姉ちゃんとエッチできないよ？」
美羽はそう言ってベッドに座っていた俺の前に来て、軽く俺を押す。
「わっ……ちょ…」
動揺を隠せない俺は、抵抗する事も忘れて押し倒されてしまう形になった。そこに美羽が覆いかぶさってくる。

「ほら、胸触ってみて？
お姉ちゃんより胸無いけど、柔らかいよ？
おっぱい入門用にピッタリ♪」
美羽は俺の目の前で、ない胸を主張してくる
「ごくっ…」
確かに小さいが、
こんな間近でおっぱいを見たのは初めてで、
俺にはとても魅力的に見える。
「……ぐっ」
（確かに柔らかそうだ…。
美羽のおっぱいは、一体どんな柔らかさなんだろう）

「…ほら、触ってみて？」
たまらず俺は吸い込まれるように、軽く胸を触る。
「……」
「あっ……」
その瞬間、美羽が甘い吐息を漏らす。
その声に俺はますます興奮する。
「…どう？柔らかいでしょ？」
「あ…あぁ…」
あ♡
ぷにっ♡

一度触ってしまって歯止めが効かなくなってきた俺は、更に胸を揉む。
「んっ…ふっ…」
「美羽……」
美羽のこんな色っぽい声、初めて聞いた。いつも馬鹿やってくるから俺はそういう対象として見ていないつもりだったが、こんな声を聞いてしまうと、一気にその気持ちが揺らいでしまう。
んぁ♡
ふにふに
「んっ…んっ…」
（やっぱり姉妹だな。こうしてみると美羽は中々…いや、かなり可愛い）

「んっ…んっ…どうしたの？遠慮せずもっと触っていいんだよ…？」
「あぁ…」
俺はたまらず、両手で胸を触る。
「あっ…」
あんっ♡
もみ
もみ
柔らかい。決して大きくないのに、どうしてこんなに柔らかいんだろう？

「ふふっ…お兄ちゃん、すごくエッチな顔してるよ？」
「し、しかたないだろ？
誰がこんな気分にさせたと思ってるんだ？」
「えへへ…。でも嬉しいかも…。
…生のおっぱいも、見てみたい？」
俺は無言で頷く。
もみ
もみ
あんっ♡
「じゃあ、脱がせてみて？
後ろにホックついてるから…」
「あぁ…」